

一二七期生として感じた 「安積」と後輩に望むこと

渡邊 悠子

(百十七期)

現在、私がこの学校に入学して三度目の夏である。中学校時代とは比べものにならない程に時間の流れは早く、高校生活も残す所、あと

八ヶ月あまりである。部活動も生徒会も何とかやり遂げ、六月末に引退した。遅ればせながらやっと私も本格的に受験生となる。しかし、今までサボってきた分のツケもあるので、今から先が思いやられるのだが……そのような私であるが、今回は「共学化第一期生」としての視点で安高について語ってみようと思う。

まず、私が高校進学の際に安高に感じた魅力の一つは「男子校」であると言うことだ。私の出身中は県北なので当時安高についての情報は少なかったのだが、安高OBの父から聞いた話や安高新聞からだけでも、他校では見られない独特の雰囲気を感じ取れた。また、どちらかという女子の持つ雰囲気よりは、男子の放つ雰囲気、居心地のよさを感じる私にとって、生徒の大半は男子で、自分達が女子一期生であるということも実に魅力的だった。現在は完全共学化により、男子校時代の独特の雰囲気は随分と薄れてしまったように見えるが、年中行事での熱狂ぶり等を見ると、「それ」は確実に受け継がれているのだと妙に納得させられる。

安高の魅力をもう一つあげると、安高には個性的で自分をちゃんと持っている生徒が多いという事だ。これは当初私が勝手に思っていたことなのだが、実際に安高に入ってみてそれが

間違いでないと確信した。そもそも安高には各学校のトップが県内各地から集まってきていると言っても過言ではない。中には私と同じくその校風に惹かれて入った生徒もいることだろう。だから、そんな彼らが個性的ではないわけがないのだ。加えて、先生方も実に個性的な方ばかりである。そのおかげとも言うべきか、私は予想以上に充実した高校生活を今まで送ってこれたと思う。

私を含む一一七期生は、共学化初年度から完全共学化に至るまでの三年間をこの学校で過ごしている。いわゆる過渡期の最も重要と思われる時期に身を置いていることは、それだけでも貴重な体験だと思う。私個人としては、主に生徒会役員として共学化に伴う問題の解決や、新生安高の基盤作りに参加してきた。何せ、今まで男子だけだった所に女子が入ってきたのだから、問題と思われることが出てくるのは当たり前で、行事などの点では生徒会でも随分と苦労した。学校生活での問題点については、生徒からもその都度意見が出され、完全とは言えないけれど改善されたと思う。そして共学化してから(細かく言えば、共学化が決まってから)現在に至るまでの新生安高の基盤作りにおいて、生徒の力というのはやはり大きかったと

思う。ほかの学校がどうかは分からないけれど、このような過渡期における様々な変革に生徒が直接的に関わることができるようにも、結構珍しいのではないだろうか？ 実際、ジャージのゼッケンを従来のものから現在の形に変えた事など、生徒の声があつたからこそ実現した例もいくつもある。これらは安高生が開拓者精神と自主自律の精神に基づき、自分達で新たな安高を作つていこうとした結果であり、また、それが可能な学校であつたからこそある結果なのだと思う。また、よりよい学校生活を送れるようにと、私達が奮闘したことは、今までの伝統や規則などをもう一度振り返るとてもいい機会ともなつた。共学化で安高が少しずつ変わっていく中で、変わらないもの、変わつてはいけないものも分かつたような気がする。

このように、日々温故知新をくり返してきたが、中には生徒の自主性・主体性が足りないのではと感じる場面もあつた。もちろん前述したように、今の安高は生徒の力なくしては成り立たなかつたが、このように全校生徒に関わるような事柄に対しての生徒の関心も、まだまだ低いような気がするのだ。もちろん何か問題として取り上げればそのことについて全く考えていない生徒はいないだろう。しかし、次第に消極

的になり、それがなかなか表面に現れてこない気がしてならない。確かに、学校の中で何かを変えたりすることは、どれも一筋縄ではいかなしいし、面倒な事かもしれない。確かに今年度で共学化は完成したし、新生安高の基盤もほぼ固まつたと思う。しかし、共学校としての安高の真価が問われるのはこれからだと思うし、学校というものは時代の流れの中で少なからず変わつていくものであるから、在校生また未来の安高生には、自分の置かれていく状況に安住しないで、常に開拓者精神、自主自律の精神、そして安積の精神を忘れず、十分な自主性・主体性を持つて高校生活を送つて欲しい。そして開校当時から先輩方がして来たように、これからは安高を、ひいては自分自身をより高めるためにも各々が充実した高校生活を送つて欲しい。

最後に、言いたいことが上手くまとまらなかつたが、私の安高への思いの一部が少しでも皆様に伝われば幸いである。

安高に入つて思うこと

矢吹 純

(百十八期)

奇妙きてれつな格好でとても楽しそうに練り

歩いて行くお兄さん達。学校祭での仮装行列をする高校生の姿に、幼い私は目が釘付けになりました。

「あれはどこの学校の人なの？」「安積高校よ。」
「私もあの学校に入りたい！」

月日は流れ、紫旗祭で仮装行列に参加する私がいきました。私が安高に入学してから早一年半が経とうとしています。女子二期生としてのスタートでした。応援歌練習を乗り越え、野球応援ではOBの先輩方と草の上に寝転び人工字を作りました。距離は男子の半分でしたが、ロードレースで健闘し、紫旗祭・体育祭では安積魂を發揮しました。元男子校の安積も、今年度で男女共学化が完成し、私は初の女性生徒会長として現在活動しています。「初」というと自分では変な感じがします。今まで男子ばかりだったのだから当然ですが、ずっと共学の中でしか過ごしたことの無い私には不思議な感じがします。長い歴史の中で、このような立場になったことは名譽あることだと思います。ですが、女子がなることも普通のことだと思います。男子でも女子でもどちらでも良いと思います。「男だから」「女だから」にこだわる必要はないと思うのです。安高に通いたい、と思う気持ちや、

安高が好きだと思ふ気持ちに男女での変わりはないのですから。

また、今年で服装自由化になって三年目になります。服装への認識には個人差があり、その選び方は千差万別であります。校舎や教室の様子は明るく、鮮やかです。「制服」の着用で同じ姿に統制することに囚われることはないと思います。男子で学生服を着ている人も多数いますが、それも自分で選べる枠があるからこそその服装なのです。TPOを考えた服装を自己決定することが、安積の校風である自主自律に繋がっています。

さて、今の安高を見てみますと、内面的にどこか消極的です。話をしてみると、みんなそれぞれを考えや興味深い意見を持っているのに、公の場にはなかなかそれが上がってこないのです。今の安高生に足りないものは、人任せにしないで自分が一歩前へ出る積極性ではないでしょうか。違う、と思った時に違うと言うことは恥ずかしいことなのか。自分の考えていることを人前で話すのはキザなことなのか。

私にも、人前で話すことがはばかられる時があります。しかし、時代の流れと言つても、このままでいいとは思えません。消極的な全体の雰囲気を持ち破る強烈さが必要です。安高には

もっと、「変な奴」がたくさんいていいと思います。「変」というのは個性を内発する活力のある人のことです。「変」で結構ではないですか！生徒の一人一人が「自分の力で学校を変えられる」「変える必要がある」という意識を強く持つ必要があると思います。

伝統を守り続けていくだけでは、進歩がないでしょう。その時代、その時代での空気というものがあります。その空気と伝統を混ぜ合わせ、次の時代へと残る安積の歴史が刻まれていくのです。嬉しいことに、今の安高では男女それぞれものの見方に、ナマで触れることができます。形や外観は変わっても、根本精神は変わりません。恥じるのではない、いつまでも誇れる安高であることを望んでいます。

安積に入学して

西川 穂高

(百十九期)

僕達一一九期生が入学してから、三か月が過ぎた。入学当初は、中学生活とのあまりのギャップとめまぐるしさに日々の生活を送るだけで一杯だった僕達も、少しずつ新しい生活に慣れてきた。個性的な先生によるスピーディーで高

度な授業、充実した部活動、そして一癖も二癖もある友人達、その一つ一つが、ゆっくりと自分の体に馴染んできた。そんな毎日の中で、僕はようやく、一世紀以上の間大切にされてきた安積魂、開拓者精神というものが何なのか、分りかけてきたような気がしている。

入学したばかりの頃、友人達の会話の中で、「安高生らしさ」とは一体どんなことなのか、強く意識させられたことがある。その頃はまだ周囲の新しい友人達とはあまり話さなかったのだ、僕はいつも輪の外から会話を聞くだけだったのだが、その時の話題は、日本の社会情勢と戦争について、という内容だった。アメリカに対する日本の態度について、イラク戦争と自衛隊について、様々な話題が話される中で、僕は大きな衝撃を持ってある事に気付いた。それは話している一人一人が全ての話題について筋の通った説得力のある意見を持っている、ということだった。ここにいる全員が、単なる知識の羅列ではないと確固とした考えを持っている、その事に、僕は大きな驚きを覚えたのだ。

その後もさらに友人達の会話は続いた。話題は次々と発展し、その度に建設的な意見が取り交わされた。そして、話題が将来の夢にさしかかった時、僕は皆が既にはっきりした自分の理

想像を持っていることにまたしても衝撃を受けた。自分は小学校教師になりたくて今進路に悩んでいるという者、何になりたいのかは決まっていないが尊敬する人のようにになりたいという者などである。そして、そんな話を聞くうちに、僕は、彼らが自分の意見を主張するだけでなく、人の意見を聞いて理解できる、聞き上手な人間だという事も発見した。それに気付いた時、僕は驚いたこと以上にとても嬉しい気持ちになったのを覚えている。「安高生らしさ」とは一体何なのか、漠然とした中だが、友人達の会話の中にそれを発見することができたような気がしたからだ。

安積には、「質実剛健」という言葉で表される独特な校風、安積魂というものがある。飾り立てず、まじめで純朴であることを旨とするこの校風は、一体何から来たものだろうか。安積ははるか昔から多数の著名人を輩出してきた、福島県を中心とする進学校だ。夢を持って、大進に進みたいと願う学生が集う、勉学の聖地だ。そこには当然、多様な価値観と理想が集まり、今の安積と同じような環境が形づくられていただろう。そして、先日の友人達の会話のような光景が繰り広げられ、僕のように友人の意見に感動する学生や、友人達のように話し上手でか

つ聞き上手な学生達もたくさんいただろう。そのような環境からは当然、友人への尊敬と尊重、自分への謙虚な姿勢という、現在の安積にも伝わる質実で剛健な「安積魂」という校風が生まれる。僕は、安積の独特な校風は、男子校の情熱的な伝統に加えて、様々な価値観が集まる安積ならではの土壌が生み出したものではないか、と思うのだ。

安積は、今年度で完全共学化を迎えた。女子が入学することで独特の校風が消えてしまうのではないかという懸念もあるようだが、安積の校風が多様な価値観から生まれるものだと思えば、共学化はかえって独特な校風の確立に役立つはずである。安積のもう一つの伝統的校風である「開拓者精神」といわれるものも、自分なりの理想と、現実の自分を見つめる謙虚な姿勢を持つことから始まっていく。この安積高校で理想の自分に少しでも近づくために、真摯に自分を見つめ直す謙虚さと、意志を貫き通す強さを、いつでも忘れないでいたい。



男子校最後の卒業式

郡山市・県青色申告会連合会長

名木 昭

(六十六期)

三月一日、県立高校の卒業式が行われた。縁あって毎年母校、安積高校の卒業式に列席しているが、今回は全く例年と異なった思いを抱いて祝辞に立った。

一つには半世紀前の三月一日が私の卒業式であったこと、二つには創立百十八年で男子校の幕を閉じることになることだ。そのいずれについても世の中は大きく変わっているのだから、今更そんなことを言っても始まらないとの厳しい批判を覚悟で、卒業生諸君と保護者の皆さまへ語りかけた。

昭和二十八（一九五三）年三月一日は、戦後の学制改革で新制中学校・新制高校に六年間在籍した生徒の初の卒業式だった。当時は国立大学一学期の入試が三月三日からだったので受験生のほとんどが卒業式に出席せず、受験地向

かっていた。だから、私も高校の卒業式を経験していない。

当時は戦後の復興も緒についたばかりで、不景気風が吹き荒れている昨今とはまったく比較にならない劣悪な環境で学園生活を送った。時事川柳で「六三制、野球ばかりがうまくなり」と酷評され屈辱感を味わったことが、脳裏に強く焼きついている。浪人してでも希望校を目指すことができるのは一部で、経済的な理由からほとんどが一発勝負に賭けた。幸いにも私は合格し、教養部長の歓迎のことばで奮い立ったことがつい昨日のように思い出される。

「大学は、諸君を一個の人格者として遇するところである。よって四年間の学園生活で良き友をつくるように……」

このことばをどう解するかは、学窓を巣立つ卒業生自身だ。責任ある行動を取り、自主自立こそ、混沌とした社会を乗り切る大きなパワーになることは間違いない。

指示待ち人間ではダメ、いつまでも両親ベッタリのパラサイト人間でもダメ、主体性を持つ

て行動すべき、と私が青春時代に受けた感動を卒業生へ伝えるべく語りかけ「二十一世紀はまさに諸君のためにある」と結んだ。

第百十六期生を送り出し、男子校としての母校は幕を閉じ、四月からは完全に男女共学高校として新たな道を歩む。私自身、創立五十周年の年に生を受け、男子校最後の卒業式が卒業五十年という不思議な巡り合わせにある。

第百十六期生にとつて、代表が答辞で述べていたが、最高の思い出は一年生の時の二十一世紀梓による第七十三回選抜高等学校野球大会出場だ、と異口同音に語る。バス五十八台、新幹線も十六両編成の臨時列車、飛行機利用の人など約七千人が応援歌を広い球場に響かせた。その時の余韻が、卒業式後の「大進撃」で爆発したのはいうまでもない。小雨降る中、女子生徒も入って大きな渦となり、全校生が一丸となつて若いエネルギーを発散させた。かくして男子校最後の卒業式は、数々の感動を残して閉じた。